

○1 番（川上陽平）登壇 皆さんおはようございます。自民党の川上陽平です。私は、自由民主党福岡市議団を代表して、地域における交流の場づくりについて、地域コミュニティバスについて及び那珂川河川敷への遊歩道の整備についての 3 項目について質問いたします。よろしくお願いいたします。

まず、地域における交流の場づくりについてお尋ねいたします。

日本全体の人口が減少し、活力の低下が懸念される中、福岡市の人口は 149 万人を超え、さらに増加を続けると見込まれています。現在は高齢化率も低く、元気なまちとして全国的にも注目される都市ですが、高齢化はどんどん進行し、5 年後には 5 人に 1 人、15 年後には 4 人に 1 人が高齢者となり、本市においても高齢社会を迎えると思われています。地域によっては既に 15 年後の福岡市全体の高齢化率である 25% を超えるところもあり、これからも急速に年齢構成が変わっていきます。これに伴い、コミュニティや地域福祉の担い手の不足なども懸念される所です。このように、地域のあり方が変わっていく中、地域における生活の質の高さをどのように維持していくかが大きな課題となっています。地域経済を活性化し、都市の成長を実現していくことはもちろん大切ですが、高齢化の進んだ地域の活力を維持し、地域で誰もが元気に生き生きと活躍できるまちをつくりたいと考えています。スポーツや文化活動については、学生時代には部活動という形で盛んに行われていますが、社会に出てからはそうした場も時間も少なくなり、どうしてもそのような活動から遠ざかってしまいがちです。以前は会社の福利厚生としての文化・スポーツ活動が盛んでしたが、雇用形態の多様化などにより、そのような企業の風土も変わりつつあり、文化やスポーツに触れる機会はどんどん減りつつあるのではないのでしょうか。高島市長は、人と環境と都市が調和のとれたアジアのリーダー都市を掲げ、生活の質の向上と都市の成長の好循環によるまちづくりを目指して取り組みを進めておられますが、生活の質の向上にとって、身近な場所における文化やスポーツ環境の充実はとても重要なのではないのでしょうか。学生時代の部活動のように、自分の大好きな文化やスポーツ活動に集い、趣味を同じくする者同士で語り合い、ともに活動することは、一人一人の人生を豊かで充実したものとするとても大切なことだと思います。このような意味では、体育館や図書館など身近な地域にあるべきこれらの施設は、市民の生きがいづくりや高齢者の健康増進などに大いに役立っていると思えます。地域におけるこうした場は、誰にとっても大変貴重なものであり、行政がきちんと提供すべきものであると考えます。

そこで、体育館、図書館については、現在どのように配置されているのか、また、利用状況はどのようになっているのか、お尋ねします。

また、市民センターでは高齢者を対象とした事業やサークル活動等が行われており、市民の生きがいづくりに貢献しています。さらに、雑餉隈や和白、今宿・周船寺には地域交流センターが置かれていますが、これは、会議室、多目的ホール、体育館機能や図書館機能が一つにまとまっており、対象地域の住民の集いの場、世代間交流の場として、また健康増進や生きがいづくりに大いに役に立っている素晴らしい施設だと思っています。

そこでお尋ねしますが、市民センター、地域交流センターはどのような考えに基づき配置しているのでしょうか、お答えください。

次に、地域コミュニティバスについてお尋ねします。

本市の公共交通は、市営地下鉄、JR九州の各路線、西日本鉄道の各路線による鉄軌道に加え、市内を網の目のようにネットワーク化された路線バスやその他高速バス、タクシーなどから成り立っています。その中でも路線バスは、身近にあるバス停にまで毎日決まった時刻に迎えにきてくれる頼りになる交通手段として 1 日約 40 万人の方に利用され、通勤、通学の足として、また通院、買い物等の生活交通の足として活用されています。

その一方で、多くの方に利用されているものの、地域の高齢化等により、昭和 40 年代をピークとしてその利用者は全体としては減少傾向にあり、平成 14 年の道路運送法の改正により、路線の休廃止がそれまでの許可制から事前届け出制となるなど、バス事業の規制緩和が進んだことで、福岡市内においてもバスの不採算路線の休

廃止がふえております。お住まいの近くにバス停も鉄道も駅もないようないわゆる交通空白地が生じてしまう路線の休廃止に対しては、市が収支差額の補助を行うことで運行を継続している路線も生じております。また、都市圏各自治体においても、コミュニティバスを運行させることで市民生活を支える取り組みが展開されております。このように、地域における市民生活を支える上で路線バスの維持は今日的課題として大きくクローズアップされているところです。南区においては、高宮駅、大橋駅、井尻駅の3つの駅がある西鉄天神大牟田線と、主要な道路等を中心に走っている路線バスが、市民の皆さんの重要な公共交通手段となっております。しかしながら、南区内の一部ではこれまではできていたにもかかわらず、バス路線の廃止に伴い、直接区役所のある大橋まで行くことができなくなった地域も生じております。市民生活における目的地として、さまざまな手続で区役所に行く、文化活動などで市民センターを訪れる、区の体育館に行くなどは当然あることで、バスを乗り継げば行くことはできるかと思いますが、雨の日もありますし、日差しの厳しいときもあります。高齢者の方や子どもさんを連れの方などは、やはりバスに乗ってそのまま目的地に着くことができることを望まれていると思います。また、丘陵地に開発された住宅地におきましては、入居後約40年が経過し、平成22年度の国勢調査による福岡市全体の高齢化率が17.6%であるのに対し、柏原三丁目で31.8%、鶴田校区で22.9%と高齢化の進んでいるところもあります。こうした住宅地では最寄りのバス停までの距離が遠く、さらに丘陵地のため、例えば柏原三丁目の場合、最寄りのバス停との高低差は最大で約70メートルもあり、バス停までの上りおりに年齢を重ねるにつれ苦勞が増し、大変つらい思いをされている方もいらっしゃると思います。例に挙げた南区の鶴田校区や柏原地区においては、通勤、通学、通院などの生活交通を確保するために、特にバス路線について、地域の皆さんはどのような御要望をお持ちであるのか、お尋ねいたします。

次に、那珂川河川敷への遊歩道の整備についてお尋ねいたします。

那珂川は、その源を脊振山に発し、本市の中心市街地を貫流して博多湾に注ぐ本市を代表する河川の一つです。その流れは、古くから農業用水に利用され、近年になっては上水道の水源として本市の発展に大きな役割を果たし、さらに、都市の骨格として環境や景観にも大きな役割を持っております。

一方、平成21年7月の中国・九州北部豪雨では、那珂川上流域を中心に甚大な浸水被害が発生し、また、本市におきましても塩原、老司などで床上浸水が発生いたしました。近年では1時間に80ミリ以上の猛烈な雨が降る回数もふえており、特にことし7月の九州北部豪雨では、これまでに経験したことのないような大雨という表現が生まれるなど、近年の集中豪雨は年々その激しさを強めてきていると感じており、治水対策につきましても那珂川は大変重要な役割を持った河川であると思っております。現在、河川管理者である福岡県におきましては、平成21年の浸水被害を受け、一刻も早い対応策という周辺住民の意向を酌んでもらい、平成22年度からおおむね5年間で緊急的かつ集中的に那珂川の床上浸水対策特別緊急事業を進めてもらっており、感謝するとともに、一日でも早い工事の完了を期待しているところでございます。今回の浸水対策事業では、治水上、番托井堰の改築が必要であり、堰の高さを現在よりも低くする予定ということで、その結果、平常時の河川の水位が低下し、井堰の上流部において陸地が発生すると聞いております。

そこで、まず今回の床上浸水対策特別緊急事業において、番托井堰の改築工事の計画がどのようになっているのか、お尋ねいたします。

以上で1問目を終わり、2問目以降は自席にて質問いたします。

○1番（川上陽平） まず、地域における交流の場づくりについてお尋ねいたします。

先ほど答弁をいただいたとおり、体育館や図書館、市民センターなどは主に区に1つ設置され、それに加えて、和臼、雑餉隈、今宿・周船寺に地域交流センターが配置されており、大変多くの市民に利用されています。このような施設を利用することで市民はスポーツや文化に親しみ、心身ともに健康になり、また、人との交流の中で生きがいや幸福感を感じることが出来ます。このような場所に誰でも気軽に行けることが一人一人の生活の質を高めるためにとても重要なことだと考えます。しかし、地域によってはこれらの場所へアクセスが非常に悪いと

ころもあります。現在は自動車による移動でカバーされている場合がありますが、高齢化が進展するに伴い、公共交通機関で気軽に行けるところにこうした施設があることがより必要となります。特に丘陵地で道が狭い南区の南部は交通の便が悪く、バス路線も市民センターのある大橋に直結していないなど、これらの施設に大変行きにくい状態となっています。さらに、バス路線の減便や廃止などもあり、また高齢化も進んでいる地域であるため、今後より一層移動が困難な市民がふえてくるものと思われます。地域交流センターの設置については、現在、基本計画においてその位置づけが決定され、その後、3つの地域交流センターが開館し、残った野芥の地域交流センターについても設置場所の検討が進んでいるものと聞いております。南区は市内で2番目に多い人口を抱え、しかも、南部は市民センターや体育館へのアクセスが大変悪い状態です。人口当たりの施設サービスの量という観点からも、南区南部に地域交流センターがあっても決しておかしくはないのではないのでしょうか。

そこでお尋ねですが、現在、基本計画の改定のための総合計画審議会が開催され、パブリックコメントが行われておりますが、この基本計画において南区南部に新たな地域交流センターを位置づけるべきではないかと考えますが、御所見をお伺いいたします。

次に、地域コミュニティバスについてお尋ねいたします。

鶴田校区では、大橋まで直接行くことができた既存のバス路線が廃止となったため、区役所まで乗りかえなしで行くことができるバス路線の再開を望まれているとのことでした。また、柏原校区からは丘陵地にある住宅地から最寄りのバス停まで距離があり、さらに高低差もあるため、バス路線の乗り入れをしてもらいたいとの地域住民の切なる思いが長らく寄せられているとの答弁でした。鉄道と比較して路線バスはバス停間隔が短く、家のすぐ近くまで迎えに来てくれます。また、高齢化による体力の低下から、これまでは苦もなく上れていた御自宅までの坂道が遠く感じられている方や、自動車運転免許の返上などのタイミングを迎える方が今後ふえていくことを考えますと、高齢化の時代に通院や買い物などの生活交通の手段として、路線バスはますます地域住民にとって欠かすことのできない重要な交通手段となってきていると思います。

翻ってみるに、丘陵地に開発された住宅地は、市内一円の郊外部に点在しており、答弁にありました地域の悩みは、何も南区の特定の地域だけに限ったことではなく、御苦労されておられる方は市内各所におられることと思います。このような中、例えば東区的美和台校区は丘陵地に開発された住宅地で、入居から数十年経過して住民の高齢化が進んだ地域ですが、よりきめ細やかなバス路線を実現するために活発な取り組みがなされているとお聞きしております。今後の地域の取り組みの参考になるかと思しますので、美和台校区は生活交通の確保に向けてどのように取り組まれているのか、お尋ねいたします。

次に、那珂川河川敷への遊歩道の整備についてお尋ねいたします。

河川には、雨が降ったときには被害を出すことなく安全に水を流す役割がある一方で、雨が降っていないときは市街地の中に広がる貴重なオープンスペースとしてさまざまな役割が期待されています。建物が建ち込んだまち中の道を抜けて橋の上を通るとき、広々として奥行きのある川の風景は開放感を与えてくれます。さらに、近年はヒートアイランド化する都市をクールダウンしてくれる風の道の役割が確認されるなど、環境面における役割も非常に大きいと言われております。しかし、那珂川のように周囲の市街化が特に進んだ川におきましては、都市に残された限りあるスペースとして、より積極的な利活用を進めることも必要ではないかと考えます。例えば、南区清水や博多区美野島あたりでは、りぼんシティオ那珂川として川に顔を向けたまちづくりが進められ、そのまちづくりの中心となっている那珂川の様子には目を見張るものがあります。河川敷と護岸堤防の上の両方に上下並行して遊歩道が整備されており、多くの人がウォーキングやジョギングをする姿が見られます。その中でもウォーキングは誰もが手軽にできる、激しい運動をしにくい高齢者が取り組むことのできる運動として、その効果やスタイルの認知が高まっており、今やスポーツの一つとまで言われるようになっております。超高齢社会を迎えた現在、さらに、今後高齢者の割合がふえてくる世の中においては、より健康な生活を送っていただくためにも、ウォーキングなど気軽に運動できる場をつくっていくことが必要であると考えています。

先ほど1問目のお答えでは、那珂川の床上浸水対策特別緊急事業で番托井堰の改築工事が行われ、井堰の高さ

が 1.5 メートル下がり、その結果、堰の上流部においては、今まで川底だった部分が水面上にあらわれてきて、新たに河川敷ができてくる見込みがあるとのことでした。

そこで、もし新たに河川敷が生まれてくるのであれば、それを生かして、現在、番托井堰下流までつながっている遊歩道を上流側に延ばし、その周りを公園的に整備できないか、お尋ねいたします。

以上で2問目を終わります。

○1 番（川上陽平） まず、地域における交流の場づくりについてです。新たな地域交流センターについては慎重に研究するとの答弁ですが、慎重にとは言わず、ぜひ前向きに検討していただきたいと思います。財政状況が厳しいことは理解しますが、体育館や図書館、市民センターのような市民にとって非常に価値の高い重要なサービスが、住んでいる地域が違うことだけで受けやすかったり、受けにくかったりすることは見過ごすことはできません。特に高齢化が進展していく中、高齢者が体育館や図書館に通い元気になっていることで、医療費や介護費などの大幅な削減にもつながります。明るい高齢社会を目指すにはとても大切な機能だと思えます。現在、南区南部は人口が多いにもかかわらず、地下鉄も何もない、いわば陸の孤島です。高齢化が進み人口もふえません。バスも次々に廃止されています。人が集まる場所がありません。このような地域だからこそ、体育館やグラウンド、図書館などがばらばらにではなく、一つにまとまったような施設が求められています。世代を超えて人が集まり、交流できるような施設が身近な場所にぜひとも必要なのです。一部の地域の市民がこのような健康づくりや生きがいづくりの機会などのサービスを受けにくいことは問題であり、地域ごとに格差が生じていることはしっかり認識していただきたいと思います。地域交流センターを何とか近くにつくってほしいというのが市内で2番目の人口を抱える南区の南部地域の住民の切なる願いです。財政状況が厳しい中、施設の設置が簡単でないことは理解しますが、民間の資金や知恵、人材を活用するなどさまざまな工夫があるのではないのでしょうか。ぜひ積極的に検討していただき、南区南部が活力ある住みよいまちとなるよう、地域交流センターの設置を強く要望いたします。

次に、地域コミュニティバスについてお尋ねします。

東区美和台校区では、地域の皆さんが一致団結して西鉄の協力のもと、何とかして住民の足を確保するよう努力しておられるとの答弁でありました。このように、今後地域の課題を解決するためには、地域と交通事業者、それから、行政の協力が必要不可欠になってくると考えます。1問目でお尋ねした南区の課題についても、解決するためには同様のことが言えると考えます。鶴田校区におけるバス路線の廃止に伴う大橋地区へ直接つながるバス路線の再開については、幸いにしてバス停自体は残っていることから、高齢化の進む地域の通院等や、区民としての一つの拠点である区役所のある大橋地区へ向かう重要な交通手段として、運行再開を交通事業者である西鉄へ強く働きかけていただきたいと思えます。

また、柏原地区におけるバス路線の乗り入れについては、丘陵地に開発された住宅地で、自宅からバス停も遠く、高低差もあり、平成 19 年以降バス路線の乗り入れを要望されてきておりますが、なかなか解決しておりません。生活交通を確保するためには、引き続きバス路線の乗り入れの実現に向けて働きかけていくことが必要と思えますが、あわせて東区美和台のように地域が主体となった住民の意向の把握、ルートの設定、運行時間や本数、運行開始までの手続などの検討もまた必要になってくるかと思えます。そのためには、地域と交通事業者の努力に加え、行政も協力して地域、交通事業者、行政の3者の連携した取り組みが必要になってまいります。このように、バス停から遠く、また高低差のあるような公共交通が不便な地域においては、生活交通を確保するために、福岡市としてどのように取り組まれているのか、高島市長の御所見をお尋ねいたします。

最後に、那珂川河川敷への遊歩道の整備についてであります。

2問目のお答えで、那珂川の床上浸水対策特別緊急事業でできてくる河川敷を公園化するには課題があるとのことでした。確かに今回の浸水対策特別緊急事業は、とにかく川の流下容量を大きくするために緊急的に川底を掘り下げる工事であり、最終的なでき上がりの形まで整備されるものではないと聞いており、暫定的な陸地の状

態のままで公園とするには難しい点も多いと思います。しかし、暫定的ではあっても、せっかく市街地の中に新たな土地が生まれてくるわけですから、そこに遊歩道を整備し、現在、百年橋から番托井堰までしかつながない遊歩道を、さらに上流までつなげていくことができれば、那珂川の周辺に住む方々にとどまらず、多くの市民に喜ばれることと思います。正式な公園整備はできないまでも、福岡の財産であるこの那珂川について、北から南まで遊歩道を整備し、そこに緑を取り入れることができれば、多くの市民の憩いの場となり、二酸化炭素の削減、健康づくり活動の推進にもつながります。今後、河川管理者である福岡県とも十分に協議していただきますようお願いいたします。

さらに、将来、本格的な河川改修が行われ、きちんとした護岸や高水敷が整備された暁には、福岡県とも協議していただき、健康増進とレクリエーションの拠点として多くの市民に利用される河川公園を整備していただきますよう強く要望いたします。

これで私の質問を終わります。ありがとうございました。